

中山間地における銘柄米「ヒノヒカリ」の栽培特性

農業研究センター 球磨農業研究所

研究のねらい

中山間地の主要品種「ヒノヒカリ」の安定普及を図るため、その栽培特性を明らかにするとともに、共乾施設の効率的利用を目的とした作期の移動による収穫期幅の拡大を検討した。

研究の成果

1. 栽培特性

- (1) 生育パターンはコガネマサリに類似し、中山間地域では、コガネマサリの耕種基準を準用できる。
- (2) コガネマサリに比べ、穂数がやや多く穂長はやや短い、一穂粒数はかなり多く、単位面積当たりの粒数の確保は容易である。
- (3) ただし、一穂粒数を多く確保すると、二次枝梗粒が全体の50%を超え、登熟期の気象条件によっては、二次枝梗の登熟が極端に低下して成熟期の判定が困難となり、刈遅れ等による品質低下と小粒化する欠点がある。

2. 収穫期幅の拡大

- (1) 収穫期は、5月上旬移植で9月下旬、7月上旬の晩植で10月下旬となり、作期を移動することによって、約30日の収穫期幅が生じる。
- (2) 6月上旬移植と6月下旬移植との比較では、早植が登熟歩合が高く、品質収量とも安定する。

3. 普及地域 中山間地域

普及上の留意点

- (1) 適正粒数は、1㎡当たり30,000～32,000粒程度で、中苗移植では〔穂数350本〕×〔一穂粒数90粒〕、稚苗移植では〔穂数400本〕×〔一穂粒数80粒〕を目標とする。
- (2) 倒伏防止と適正粒数の確保のため、茎数確保後は中干しを十分行い、穂肥前の葉色は3.5(Fカラースケール)とし、穂肥は出穂前18日頃10a当たり2.5～3.0kgのチッソを施用し、晩期穂肥は原則として施用しない。

表1 ヒノヒカリの生育（昭和63年～平成2年） 6月15日稚苗移植

品 種 名	出穂期 月日	成熟期 月日	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本m ²	一穂 粒数	登熟歩 合(%)	収量 kg/a	玄米千 粒重 g
ヒノヒカリ	8.25	10.9	79	19.1	368	89.1	81.5	58.2	21.9
コガネマサリ	8.23	10.7	79	20.4	344	83.8	89.0	56.5	22.2

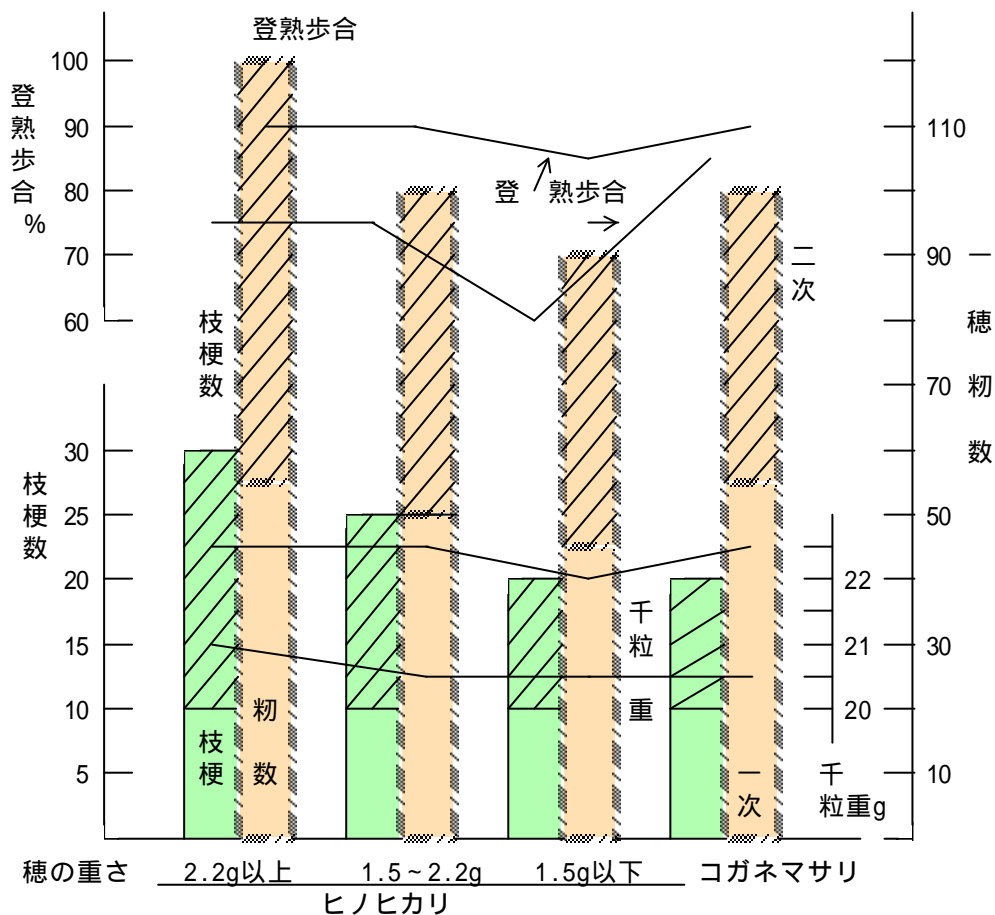


図1 穂相と登熟



図2 ヒノヒカリの移植期と出穂成熟期（昭和63年～平成2年）